

研修成果報告書

研修先 香川県香川郡直島町

研修テーマ アートによる地域おこしを学ぶ

1. はじめに

香川県香川郡直島町は、島の至る所にアート作品があり、アートツーリズムの代表例として知られている。今年には三年に一度開催される「瀬戸内国際芸術祭」の開催年であることから、アートツーリズムの現状を知る良い機会だと考え、直島町を研修先に選定した。本研修では、観光客や移住希望者が多いことには、アートだけではない理由があるのではないかという仮説を立て、住民の方にヒアリング調査を行った。調査を通して、表面上には見えない住民共通の想いや直島が抱える問題を明らかにし、アートツーリズムの在り方を考えていきたい。

2. 直島の概要

直島町は香川県香川郡に属する離島の一つで、周囲 16km、人口約 3,500 人、面積約 8.13 平米、周囲 16km の小さな島である。1916 年に三菱マテリアルの銅精錬所を誘致したことで、企業城下町として発展してきた。そのため、住民の働き口は確保されたことによる人口流出の歯止めや豊富な税収によって、裕福な自治体である。しかし、工業化が進むにつれ、島の自然は失われ、「精錬所のあるはげ山の島」とも呼ばれるようになってしまった。

1985 年、福武書店(現ベネッセコーポレーション)と協働し「直島アートプロジェクト」が展開された。2004 年は、地中美術館が完成したことにより、直島は「アートの島」として世間から認知され、アートツーリズムの成功例として知られている。

3. アート作品の見学 (家プロジェクト、地中美術館)

(1)地中美術館

地中美術館は「自然と人間を考える場所」として、2004 年に設立された。美術館の特徴として直島の景観を損なわないよう、建物の大半が地下に埋設されている。地中美術館が設置されたことにより観光客が大幅に増加した。それにより、住民の観光業への進出、移住者の増加につながった。

(2)家プロジェクト

家プロジェクトは直島・本村地区に展開するアートプロジェクトである。「角屋」「南寺」「護王神社」「石橋」「碁会所」「はいしゃ」の 6 軒の見学を行った。

家プロジェクトは、本村地区に点在していた空き家を改修し、空間そのものをアーティストが作品化したものである。作品は、町民の生活圏の中にあるため、すれ違う住民と挨拶す

るなど、沢山のコミュニケーションが取れた。家プロジェクトは、このように住民と観光客の交流を目的としている。芸術作品を地域と融合させ、住宅街は車や自転車の交通規制を行うことにより、住民の暮らしも豊かなものになっていると感じた。

現在、日本各地で空き家が問題視されている中、空き家をアート作品として公開することで、古民家やリノベーションの魅力を感じさせる効果があると考えられる。家プロジェクトのある本村地区は、築100年以上の家屋も多く見られ、作品だけでなく住民の生活も身近に感じ、地域一体が作品であると感じられた。本村地区の景観を体感することで、リノベーションに魅了される移住者も多いのではないかと思った。

3. ヒアリング調査（民宿竹の家 松下さん、直島観光協会 藤井さん）

(1) 民宿竹の屋 松下竹男さんへのインタビュー

研修1日目、民宿竹の家オーナーである松下竹男さんにお話を伺った。松下さんは、40年ほど前に三菱マテリアルの技術者として直島に移住し、定年退職後、宿に困った観光客が多かったことや、自宅に空き部屋があったことから民宿を始めたそうだ。宿の営業だけでなく、リノベーションも松下さん一人で行っており、松下さん出来作の壁紙や畳もみせていただいた。私たちが訪れた際も、部屋の一角のリノベーションを日中行っており、来年から一室増やすとおっしゃっていた。

また、松下さんは毎年冬のオフシーズンは民宿を休み、趣味のスキーを楽しんでいる。松下さんは旅行好きのため、多くの宿泊者の方と関われるのが楽しいと言う。私たちのことも快く受け入れてくださり、港までの送迎や、観光案内もしていただいた。なぜ、ここまで丁寧に対応してくださるのかと質問をしたところ、宿泊者の予定を把握することで、自分自身の計画も立てやすいからだと言っていた。松下さんは、自身の生活も充実させつつ、宿泊客への気配りを大切にしているのだと思った。

また、移住者である松下さんに直島の魅力を伺うと、「人が良い」ことだと話していただいた。直島町は企業城下町であるため、裕福な家庭が多く、心に余裕がある人が多い。アート誘致の際も大きな反対運動はなく、おもてなしの心をもった人情豊かな住民性が、観光を促進したと考えられる。2日目には、本村地区のカフェ兼ゲストハウス「島小屋」を営む、移住者の方に話を伺う機会があった。なぜ、直島に移住したのかを質問すると、住民に優しくされたことが忘れられなかったからだと言っていた。オーナーが直島に観光で訪れた際、飲食店や宿泊所が整っていないと困り果てていると、地域の子どもから話しかけてくれお寿司を食べさせてもらったそうだ。アートだけでなく、住民の優しさに感動したのだという。

松下さん、島小屋オーナーさん両者とも、直島町の魅力を人だと感じており、地域住民の人となりの良さが、住み心地の良さにつながっているのではないかと考えられる。

(2) NPO 法人 直島町観光協会 藤井さん

2日目、直島町観光協会 藤井さんにエコタウンなおしまでお話を伺った。直島町観光協会は町が立ち上げた任意団体で、電話対応や窓口での観光案内といった基本的な案内業務を行うことから始まった。その後、直島銭湯のスタッフ業務、三菱マテリアルの工場見学の予約受付業務、町営バスの運営・運転手雇用業務、お土産の販売業務等を受注し、NPO 法人化してその業務の幅を広げていった。

藤井さんのお話を聞くと観光協会の取り組みはアートだけでなく、環境リサイクル産業にも力を入れていることがわかった。お話を伺ったエコタウンなおしまは無料休憩所として設置されて直島の歴史についての展示が多数あり、三菱マテリアルにかかわるものが多くあった。住民にとってはアートツーリズムの歴史は浅いものであり、生活の中心は工業のイメージの方が強いのではないかと感じた。

アートプロジェクトが始めた当初は食事処や宿が少なく、他地域に比べるとホスピタリティの質の低さが問題となっていた。洗面所の整備もなかったため、住民の善意で貸し出しを行うこともあったそうだ。観光に対して地域住民の方は知識がなかったが、移住者が増加したことで、ホスピタリティの知識を持ち寄って発展していったと藤井さんはおっしゃっていた。

また、アートを設置してよかったことを伺ったところ、「高齢者が元気になった」とおっしゃっていた。「交流」をコンセプトとするアートは、住宅の中に溶け込んでおり、また目立った看板などの案内も設置していない。そのため、高齢者が観光客の案内係としての役割を担い、あえてコミュニケーションが生まれるような仕組みができていると考えられる。アートの中核を担う福武記念財団との関係については、アートを使って観光をビジネス化するものではなく、ベネッセグループの企業理念である「よく生きる」場を直島町に提供しているのだとわかった。福武記念財団の職員は、直島に何回も足を運び、住民と積極的に関わっているそうだ。藤井さん自身も、住民の声を大切にしてくれていると感じておられた。

企業と行政が協働することで、町におけるアートの価値が向上し、観光資源になるほどの評価を得られたのだと思った。また、観光も住民が主体で参加できるような工夫がアートツーリズムの成功例となった要因ではないだろうか。

5. 考えたこと

ヒアリング調査を通して、アートと人のつながりを強く感じられた。しかし住民は、アートツーリズムをそこまで望んではいないようにもみえた。これは、島もともと直島町は三菱マテリアルに大多数の人が勤めており、観光で生計を立てる人はいなかったからである。そもそも住民は、直島のアート施設を観光資源として意図していない人もいるだろう。私は、アートツーリズムの背景には、ビジネスの側面が多いと考えていた。しかし直島のアートは観光資源ではなく、人と人をつなげるコンセプトのもと作られ、多くの住民は自分らしく暮らすことを大切にしていた。

福武記念財団や行政が住民の生活に目を向け、様々な工夫のもと、住民参加型の観光を行

っているのだ。直島アートプロジェクトは、現代アートそのものが魅力なのではない。アート目的で来た観光客が、アートを含めた景観、住民との交流によって非日常感を得られることにアートツーリズムの評価がなされているのではないだろうか。

最後になりますが、調査に協力していただいた民宿竹の家オーナー松下様、直島町観光協会の藤井様、直島町住民の皆様、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。この場をお借りして感謝申し上げます。

参考

- ・「直島(なおしま)観光旅サイト」直島町観光協会(2022)

<https://naoshima.net>

- ・「ベネッセアートサイト直島」公益財団法人福武財団(2022)

<https://benesse-artsite.jp>